言葉なき歌

中原中也論

中村稔

言葉なき歌

中村　稔

昭和二年，埼玉県大宮市に生まれる。東大法学部卒。弁護士。詩人。
中原中也・宮沢賢治らの影響を受けた。「世代」に参加，詩集『無言歌』『樹』『鵜原抄』『宮沢賢治』『中原中也研究』（編著）他に『中原中也全集』の編集にたずさわる。

昭和48年1月10日　初版発行
昭和49年4月30日　4版発行

言葉なき歌

著作者　中村　稔
発行者　角川源義
印刷　奥村印刷
製本　宮田製本
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見2—13—3
振替　東京195208　郵便番号102
電話　東京(265)7111(大代表)
© Printed in Japan
0095-884022-0946(1)

目

次

言葉なき歌　五
中原中也像のなりたち　八三
中原中也の生活　一四九

*

鑑賞三篇

「一つのメルヘン」をめぐって　一八一
「月の光」について　一九五
「言葉なき歌」の魅力　二〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

*

中原中也と立原道造　二二五

音楽性について――中原中也の場合――　二三一

中原中也との出会い――後記にかえて――　二四七

装丁　熊谷博人

言葉なき歌

中原中也の詩作の中で、「春日狂想」をどう位置づけたらよいのか。中原を読みはじめてからもう三十年に近い。「春日狂想」をどう位置づけるかがきまるまでは、私の中原論をしめくくるわけにはいかない。長いこと私はそう思いつづけてきた。それは「春日狂想」との出会いが、いわば私にとって中原中也との出会いであったからである。

愛するものが死んだ時には、
自殺しなけあなりません。

数え年二十歳に達しない少年に与えた、この作品の冒頭の二行の衝撃を私は今でもありありと記憶している。その衝撃の記憶は、確かに私が当時おかれていた環境とかかわっている。数え年二十歳になれば徴兵検査をうけるはずであった。不合格になることはほとんど期待できなかった。その後には、入営が予定されていた。一旦、入営すれば、生還ののぞみはない。私は

ほぼそう感じていた。太平洋戦争の末期であった。実際は、徴兵が一年繰下げられ、さらに、入営を待たずして戦争は終ってしまったのだが、そして、そのために、三十年近く中原中也にかかずらうこととなったのだが。それにしても、私は愛するものたちの死を、あるいは愛するものたちが確実に死に向っていることを、数知れず、目撃していた。それなら、「自殺しなけあなりません」というわけか。それより他に、「方法がない」わけか。それでも私がなお生きていることは、業とでもいうべきものなのか。

けれどもそれでも業（？）が深くて、
なほもながらふこととともなつたら、

奉仕の気持に、なることなんです。
奉仕の気持に、なることなんです。

愛するものは、死んだのですから、
たしかにそれは、死んだのですから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

もはやどうにも、ならぬのですから、
そのもののために、そのもののために、

奉仕の気持に、ならなけあならない。
奉仕の気持に、ならなけあならない。

「もはやどうにもならない」という嘆きは、少年の私にまことに痛切にひびいた。日々は私の眼には余生のように映じていた。そういう時期に中原中也に遭遇したことがはたして幸であったか、どうか、疑わしい。それにしても、個人的体験としての中原を語らずに、そういう体験をつうじてこの詩人の意味を考えずに、私にとって中原中也論は成り立たない。

「朝の歌」も又、ほぼそうした私の生活感情にふさわしいものであった。

鄙びたる　軍楽の憶ひ、
手にてなす　なにごともなし。

といい、あるいは

倦んじてし　人のこころを
諫めする　なにものもなし。

とうたうふかい倦怠の嘆息は、私にとって慰めであった。この作品の古典的な声調のととのいは、私にはどうでもよいものであった。この詩人が「手にてなす」というとき、「手」がどういう重みをもっていたかに、気付いたわけではない。「手にてなす」「倦んじてし」「諫めする」といった表現は、ぎごちなく感じられたが、そのためにかえって新鮮に思われた。私にとっては、「手にてなす　なにごともなし」と言いきってくれる詩句がそれ自体かけがえのないものであり、「諫めする　なにものもなし」という詩句は、熱気をおびた戦時下の風潮にさからって、わが「倦怠」の城をきずく、ひとつの貴重な手がかりであった。

だが、「朝の歌」にこの詩人の出発をみるべきだろうか。いわゆるダダの擾乱(じょうらん)をへた中原中也が、はじめて古典的文体と十四行詩の形式の中に定着した倦怠感に、彼の詩人の出発をみることは広く行なわれてもいるし、私自身もそう考えてきた。そのことには、それなりの理由がある。私の個人的愛着については別としても、中原自身が、後年自ら記した「詩的履歴書」の中で、

大正十五年五月、「朝の歌」を書く。七月頃小林に見せる。それが東京に来て詩を人に見せる最初。つまり「朝の歌」にてほゞ方針立つ。方針は立つたが、たつた十四行書くために、こんなに手数がかゝるのではとガツカリす。

と書いていることも知られている。ほぼ方針立つ、という意味で、この作品を中原が重視していたことは、疑いないわけである。もっとも、これが「東京に来て詩を人に見せ」た最初でなかったことは、大岡昇平氏の証言もある。中原にとっての自信作であったにはちがいないが、この文章をそのまま額面どおりにうけとってよいか、どうか。中原中也の晩年の代表作を語るとき、人は、「一つのメルヘン」をいい、「冬の長門峡」をあげることが多い。こうした抒情詩の系列の出発として、「朝の歌」をあげることは、いかにもふさわしいものに思われる。そうとすれば、「春日狂想」はどう位置づけられるのか。そういう試みに値しないような作品なのか。私にはそうは思われない。「春日狂想」こそが最も中原中也的な、いいかえれば、中原中也の独創性が最も横溢している、他の詩人によっては決して書かれることのない、かけがえのない作品であった、そう私は考える。私は、じぶんの個人的体験に執着しすぎているのだろうか。そうかもしれない。しかし、そういうほそい体験の紐をつうじてしか、人が詩とつながる

ことはありえない。私はここで、結局、私の中原体験を語ることしかできないし、それ以上のことを語ろうとするわけではない。

私は、中原中也の出発を、『少年時』の作品群、ことに、「寒い夜の自我像」に認めたいと思う。何故、「朝の歌」に彼の出発をみないのか、から説明すべきであろう。ひとつは、「朝の歌」は、『山羊の歌』の中で、中原自身によって、『初期詩篇』中の一篇として位置づけられている。そして、この『初期詩篇』の作品群は、まことに多様な感性の開花、技法の試みを示していて、興味つきないものがある。しかし、こうした多様性がじつはこれらの作品群が試作の域を出なかったことを示しているのである。ことわっておけば、試作であるということは個々の作品の優劣とは無関係であって、詩人にとって、自覚的な意味での詩法が確立されていない、ということである。ここで、「朝の歌」という作品にかぎっていえば、私にはこれが中原中也という稀にみる個性的な詩人の出発にふさわしい作品とは思えない。

天井に　朱きいろいで
　戸の隙を　洩れ入る光、
鄙びたる　軍楽の憶ひ
　手にてなす　なにごともなし。

この十四行詩の欠点は、第一聯があまりにも見事にうたわれていることにあるだろう。それにふさわしい展開を第二聯以下が示していないのである。

小鳥らの　うたはきこえず
　空は今日　はなだ色らし、
倦んじてし　人のこころを
　諫めする　なにものもなし。

小鳥らの「うた」という表現もとがめまい。「はなだ色」という形容も、凡庸だとみえるが、それも悪くはないし、「倦んじてし」、「諫めする」といった表現の佶屈もしばらく措くことにしよう。朝が訪れて、なお詩人は倦怠にとざされている、そういう発想と、それを造型するきびしくもやるせない声調の高まりをここに認めることができるだろう。そして、この作品にみられるものうい感情の現実感、その現実感とあやうい均衡をたもっている古典的静謐は、やはり中原中也の独創とみてよいであろう。しかし、

樹脂の香に　朝は悩まし
　うしなひし　さまざまのゆめ、
森竝は　風に鳴るかな

ひろごりて　たひらかの空、
　土手づたひ　きえてゆくかな
うつくしき　さまざまの夢。

この第三聯、第四聯はいかにも貧しくはないか。いわば、第一聯、第二聯の倦怠が、たんに過去への哀惜におきかえられてしまっている。「土手づたひ」はともかくとして、「消えてゆくかな　うつくしき　さまざまの夢」というような表現はどうにも手がつけられない。何よりも、第三聯、第四聯では、倦怠感が求心的にもりあがるということがなく、逆に懐旧感となって拡張してしまい、詩調もそれなりに緊張感を欠いている。

ほぼ同じことが「臨終」についてもあてはまるであろう。

秋空は鈍色にして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.